

科学研究費助成事業 研究成果報告書

平成 29 年 6 月 9 日現在

機関番号：32404

研究種目：基盤研究(C) (一般)

研究期間：2013～2016

課題番号：25370438

研究課題名(和文) 日本語自由会話における言いさし発話を含む連鎖の規則性に関する研究

研究課題名(英文) Conversational Patterns in Speech Sequences That Include Sentence-final Ellipses (lisashi) In Free Conversations of Japanese Language

研究代表者

荻原 稚佳子 (OGIWARA, Chikako)

明海大学・外国語学部・准教授

研究者番号：10458482

交付決定額(研究期間全体)：(直接経費) 2,000,000円

研究成果の概要(和文)：本研究は、日本語コミュニケーションにおける「言いさし発話を含む連鎖の制度性」を発見することを目的としている。

研究の結果、「情報提供の言いさし発話- 言いさし部分の補完- 補完内容の適切性確認」という共話を含む言いさし発話の連鎖と、「質問- 回答- 回答の一部繰り返し」という繰り返しを含む会話の連鎖が、日本語母語話者にとって規則性があることが発見された。しかし、言いさしを含む連鎖の場合は、中・韓国語母語話者にとっては、必ずしも理解しやすく好ましい会話の連鎖ではないことが明らかになった。このことから、接触場面で支障となる可能性があり、今後の日本語教育での指導が必要だと考えられる。

研究成果の概要(英文)： This study focuses on conversational speech sequence patterns with sentence-final ellipses (lisashi). Two patterns exist between Japanese native speakers(JNS) through sequential analysis. First, sequence of lisashi including co-organized sentence(giving information with lisashi- complement of - relevance of complement); second, sequence of sentence-final ellipses including repetition (question - answer - repetition of answer with lisashi). Then, generality was examined by Discourse Completion Test(DCT) or questionnaires for JNS, Chinese(CNS) and Korean(KNS) native speakers.

The results, JNS use above patterns frequently and expect the other party to do so and JNS enjoy word-rhythm with repetition and sympathize by complement of other words. However, CNS and KNS showed difficulty recognizing lisashi or the repetition. They prefer full sentences with clear meanings. The possibility of conversational problems between JNS and CNS or KNS were indicated.

研究分野：言語学 語用論 会話分析 日本語教育 対人コミュニケーション

キーワード：会話の連鎖 言いさし 会話スタイル 会話分析 日本語自由会話

1. 研究開始当初の背景

日本語教育の現場で非母語話者から聞く日本語コミュニケーションの難しさに、テンポよく円滑にやり取りすることがある。一方、日本語母語話者にとっては、非母語話者とコミュニケーションをする際に、まどろっこしい話し方や冗長性などにもどかしさを感じることもある。それらは、非母語話者の会話では、母語話者の会話に比べて一定時間内のターン数が非常に少ないことから明らかのように、言いさし発話を含む短い発話のやり取りがなされていないことが原因の一つとなっている。本研究は、その難しさを解消するために必要な基礎研究として、言いさしを含む連鎖の制度性について取り上げ、日本語教育に寄与することを目指した。

2. 研究の目的

本研究は、日本語コミュニケーションにおける「言いさし発話を含む連鎖の制度性」を発見することを目的としている。言いさし発話を含む連鎖の存在を明らかにすると共に、日本語母語話者にとってその連鎖が制度性をもつものかどうか、非日本語母語話者にとってもその言いさし発話を含む連鎖が制度性を持つものであるかを検証する。

3. 研究の方法

本研究では、これまでの研究(荻原 2012)で研究代表者が収集してきた日本語による1対1の自然会話データ(1組15分、日本語母語話者(JNS)18組、中国語母語話者(CNS)18組、韓国語母語話者(KNS)18組、計54組)を使用する。JNSによる言いさしを含む会話の相互行為の構造を会話分析の手法により発見し会話の連鎖を抽出する。連鎖の規則性の実証研究として、日本語母語話者を対象に談話完成テストを行う。

具体的には、以下の3つのプロセスを踏んで研究を行った。

(1) 日本語母語話者間の自然会話から「言いさし発話を含む連鎖」を抽出

まず、共話を含む言いさし発話の連鎖を発見するために、会話分析の手法により、JNS同士の自由会話からターン末の言いさしを抜き出し、その前後のターンの発話を詳細に観察する。その観察の中で、共通する相互行為が確認できた場合に連鎖候補として取り上げる。

ターン末の言いさしだけを取り上げたのは、話し言葉である会話においては、書き言葉の文章のように句読点が示されないので、

文の切れ目と語句の切れ目は明確に区別できない場合があり、話者がはっきりと言い終わっていることがわかるターン末で完全文かどうかの判断を行った。なお、ターンとは、Maynard(1987)に従い、「お互いの話者が機能的に、また意味的に発話内容を認めた単位」とする。

その分析から、「情報提供の言いさし 補完 補完内容の適切性確認」の連鎖と、「言いさしを含む「質問 回答 繰り返し」の連鎖が発見され、研究全体で、どの程度の一般性をもった規則性があると言えるのかを検証した。

(1)(2)では、「情報提供の言いさし 補完 補完内容の適切性確認」の連鎖について、連鎖の規則性の実証として、JNS大学生40名(男17名、女23名)を対象に談話完成テストを行った。

(2) 抽出された「言いさし発話による情報提供 補完 補完内容の確認」の連鎖についての研究

次に、JNSによる自由発話から発見された「情報提供の言いさし 補完 補完内容の適切性確認」の連鎖について、連鎖の規則性の実証を目的として、CNS大学生58名(男22名、女36名)を対象に談話完成テストを行った。

連鎖を構成する ~ の3つのターンがそろって初めて連鎖が完成するので、 ~ の共話部分が成立した場合に 補完内容の適切性確認を行うかどうかと、 ~ () - の会話がある場合()のターンで 補完を行うかどうかをJNSと同様の方法で調査した。

(3) 抽出された言いさし発話を含む「質問 - 応答 繰り返し」の連鎖についての会話スタイルの研究

第3に、分析により発見された言いさしを含む「質問 回答 繰り返し」の連鎖について、JNSとCNS、KNSがどのように捉えているかをアンケートにより調査した。

まず、「質問 回答 繰り返し」の連鎖(aスタイル)と、「質問 回答」の連鎖(bスタイル)では、どちらが盛り上がった会話であると捉えられているか、また、自分自身が質問をした時、どちらのスタイル

を行っているか、会話相手にはどちらのスタイルを望むかについて調査し、比較、考察した。

調査では、JNS 同士が 1 対 1 で行う 15 分間の自由会話の文字起こしデータで確認された「質問 回答 繰り返し」の連鎖の中から 5 つの会話を利用して調査した。

対象者は、JNS の大学生 59 名（男 18 名、女 41 名） CNS の大学生 46 名（男 19 名、女 27 名）と KNS の大学生 138 名（男 80 名、女 58 名）で、CNS と KNS は、日常生活に全く支障がなく大学での授業を受けられる日本語能力を持ち、アンケート調査の日本語理解に問題のないレベルの大学生である。

4. 研究成果

(1) 日本語母語話者間の自然会話から「言いさし発話を含む連鎖」を抽出

15 分間話された 18 の自由会話では、ターン末に全部で 2,093 の言いさしが確認でき、一人につき平均 140.6 ターンの会話が行われ、そのうち、平均 58.1 のターンが言いさしで終わっていた。平均すると、ターンの 41.3% が言いさしで終わっていることがわかった。

情報提供をしている発話を言いさしにし、次のターンで発話の省略された内容を補完しているという共話を含んだ連鎖がすべてのペアの会話において確認された。全部で 68 の共話の相互行為が見られ、一つのペアで 1~9、平均 3.8 の共話の相互行為が見られた。性別では男同士、関係別では友人同士の会話でやや多く共話の相互行為がなされていることがわかった。

確認された 68 の共話の相互行為の中で、単に「情報提供の言いさし 補完」の共話で終わるのではなく、会話例 1 のような一連のやり取りが確認された。

会話例 1 (2: 好きなアニメについて。X と Y はアニメの作品名を意味する。)

A16: 何ていうのかな、なんか、X とかさー、
(うんうん) Y とかさー、(うん) そういうのってなんか、いや、漫画で例えるとね、
(うん) 何ていうのかな、なんか、仕込まれてるといいうか、なんか、書いてる人の

(うん) 頭の中で、どう、なんか。

B16: 踊らされてる。

A17: は、そう。

会話例 1 のように、A16 で「書いてる人の頭の中でなんか」と言いさしにしたところを B が「踊らされている。」と補って文を完成し、その後、A が「そう。」と、補完内容を確認している。このような「情報提供の言いさし 補完 補完内容の適切性確認」の連鎖が、すべてのペアの会話において見られ、全部で 57 例確認できた。これは、全共話の相互行為の 83.8% に当たり、すべてのペアの会話で 1~6 例見られ、平均 3.2 例が確認できた。

談話完成テストの結果、JNS が 補完内容の適切性確認を行うかどうかについては表 1、 で補完を行うかどうかについては表 2 の通りであった。補完が行われれば、

において適切性の確認が行われる可能性がかなり高いが、補完は、必ず行われるとは言えないことが分かり、「情報提供の言いさし 補完 補完内容の適切性確認」の連鎖が、言いさしが行われた場合、一つ一つ確認しながら進めていく丁

表 1 連鎖における確認出現頻度(日本語母語話者)

機能	会話例 A	会話例 B	会話例 C	平均使用数
確認	32 (80.0%)	34 (85.0%)	19 (47.5%)	28.3 (70.8%)
意見	5 (12.5%)	2 (5.0%)	7 (17.5%)	4.7 (11.8%)
補完	0 (0%)	18 (45.0%)	0 (0.0%)	6.3 (15.8%)
質問	2 (5.0%)	0 (0.0%)	7 (17.5%)	3.0 (7.5%)
その他	4 (10.0%)	1 (2.5%)	8 (18.0%)	4.3 (10.6%)

表 2 連鎖における補完出現頻度(日本語母語話者)

機能	会話例 D	会話例 E	会話例 F	平均使用数
補完	3 (7.5%)	8 (20.0%)	2 (5.0%)	4.3 (10.8%)
感想	16 (40.0%)	15 (37.5%)	5 (12.5%)	12.0 (34.3%)
確認	19 (47.5%)	14 (35.0%)	19 (47.5%)	17.3 (43.3%)
意見	11 (27.5%)	9 (22.5%)	1 (2.5%)	7.0 (17.5%)
情報提供	0 (0.0%)	1 (2.5%)	14 (35.0%)	5.0 (8.3%)
質問	2 (5.0%)	0 (0.0%)	1 (2.5%)	1.0 (2.5%)
その他	5 (12.5%)	2 (5.0%)	3 (7.5%)	3.3 (8.3%)

寧な会話の連鎖であることが分かった。

(2) 抽出された「言いさし発話による情報提供 補完 補完内容の確認」の連鎖についての研究

JNS と同様の談話完成テストを CNS に対しても行った。結果は表 3、表 4 の通りである。

表 3 連鎖における確認出現頻度 (中国語母語話者)

機能	会話例 A	会話例 B	会話例 C	平均使用数
確認	39(67.2%)	46(79.3%)	32(55.2%)	39(67.2%)
意見	13(22.4%)	7(12.1%)	18(31.0%)	12.7 (21.8%)
補完	0(0%)	10(17.2%)	0(0%)	3.3(5.7%)
質問	2(3.4%)	0(0%)	6(10.3%)	2.7(4.6%)
情報提供	11(19.0%)	0(0%)	6(10.3%)	5.7(9.8%)
その他	4(6.9%)	11(18.9%)	4(6.8%)	6.3(10.9%)

表 4 連鎖における補完出現頻度 (中国語母語話者)

機能	会話例 D	会話例 E	会話例 F	平均使用数
補完	0(0.0%)	2(3.4%)	2(3.4%)	1.3(2.3%)
感想	18(31.0%)	15(25.9%)	26(44.8%)	19.7(33.9%)
確認	29(50.0%)	36(62.1%)	21(36.2%)	28.7(49.4%)
意見	1(1.7%)	12(20.7%)	14(24.1%)	9.0(15.5%)
新情報提供	3(5.2%)	0(0.0%)	1(1.7%)	1.3(2.3%)
質問	2(3.4%)	5(8.6%)	6(10.3%)	4.0(6.9%)
決意	13(22.4%)	0(0.0%)	0(0.0%)	4.3(7.5%)
その他	7(12.1%)	5(8.6%)	9(15.5%)	7.0(12.1%)

CNS と JNS の結果を合わせてみると、「情報提供の言いさし 補完 補完内容の適切性確認」の連鎖は、「情報提供の言いさし 補完」の共話は CNS ではあまりなされない相互行為であるが、共話がなされた場合は、ほとんどの場合に 補完内容の適切性確認がなされる。その意味で、「情報提供の言いさし 補完 補完内容の適切性確認」の連鎖には、どちらの母語話者においても一般性があると言え、普遍性がある可能性も高いと言える。

けれども、「情報提供の言いさし 補完」の共話については、JNS のほうが多く見られる相互行為だが、一般性があるとも言える。ただ、CNS であっても、補完行為をする人はおり、JNS だけにみられる

相互行為とも言えないことも分かった。

(3) 抽出された言いさし発話を含む「質問 - 応答 繰り返し」の連鎖についての会話スタイルの研究

もう一つの抽出された連鎖である「質問 回答 繰り返し」の連鎖 (a スタイル) と、「質問 回答」の連鎖 (b スタイル) では、どちらが楽しそうで盛り上がっているかについては、CNS も KNS も JNS 同様、繰り返しを含む a スタイルの会話のほうが楽しく盛り上がっていると答えたが、JNS は 8 割を超える人が a スタイルと答えたのに対し、CNS と KNS は 5 割を超えた程度で、4 割の人が b スタイルと解答しており、かなり意見が分かれていた (表 5)。

次に、自分が日常的に友人と会話するとき、どちらの話し方をしているかという質問に対して、3 母語話者ともに a スタイルの方が多かったが、JNS が 9 割近い人が a スタイルだったのに対し、CNS、KNS は 6 割程度で、b スタイルと回答した人も 4 割弱いた。

さらに、会話の相手にどちらの話し方を望むかという質問に対しても 3 母語話者ともに平均では a スタイルの方が多かったが、JNS が 9 割以上と圧倒的に a スタイルだったのに対し、CNS、KNS ともに 60% 台で、b スタイルも 3 割前後いた。

つまり、CNS と KNS は同傾向の結果が見られたが、JNS と比較して a スタイルを好み、使用していると認識し、相手にも望むという明確で強い傾向は見られなかった。

表 5 スタイルの捉え方と使用の志向

	会話スタイル	楽しそうな会話	自分の話し方	相手に望む話し方
日本語母語	aスタイル	83.1%	88.1%	91.5%
	bスタイル	12.5%	10.3%	5.2%
	その他	4.4%	1.7%	3.3%
中国語母語	aスタイル	53.2%	63.8%	63.8%
	bスタイル	40.4%	36.2%	34.0%
	その他	6.4%	0.0%	2.2%
韓国語母語	aスタイル	54.9%	60.1%	67.2%
	bタイプ	41.6%	39.1%	25.5%
	その他	3.5%	0.8%	7.3%

そこで、JNS と CNS、KNS の傾向の差について詳しく調べたところ、連鎖「質問 回答 繰り返し」の 繰り返しの仕方によって結果に差があることがわかった。

JNS の場合は、繰り返しが語句のみの言いさしでも完全文の終助詞ありでも、8~9 割の高い割合で a スタイルの方が楽しそうな会話だと答えたが、CNS、KNS の場合は、どちらも語句のみの繰り返しの場合は、b スタイル

の方が楽しそうだとする人が 5 割以上おり、a タイプを選んだ人より 9~18%多かった。

しかし、終助詞ありの繰り返しの場合は、CNS も KNS も a スタイルを選んだ人の方が多く、7~8 割おり、JNS と同傾向と言えることがわかった (図 1、2)。

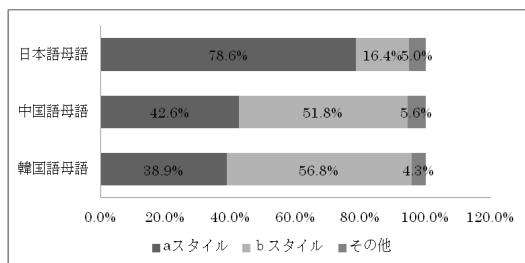


図 1. 語句のみの繰り返し

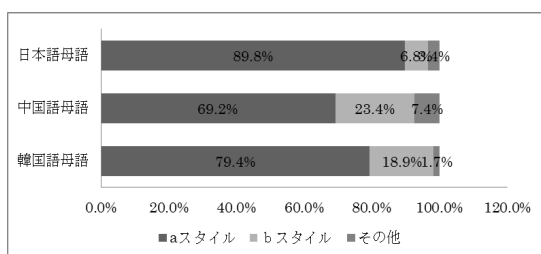


図 2. 終助詞ありの繰り返し

JNS、CNS、KNS は、終助詞を含む繰り返しを含む「質問 回答 繰り返し」の連鎖の場合は、会話スタイルについて同様の傾向があり、似た会話スタイルがあるといえるが、語句のみの繰り返しを含む連鎖の場合は、JNS と CNS、KNS の会話スタイルに対する志向は大きく異なると言える。

例えば、会話例 2a のように言いさしで発話された 回答を「Yだ」と文完結し、終助詞「ね」を付加した場合、この「ね」は上昇した後下降しているが、轟木 (2016) によると、このような「ね」は、話し手と聞き手が共有している情報や眼前の事態についての話し手の理解や感覚について、感情を前面に表出し、回答の同意表明として使われるとしている。終助詞「ね」は上昇イントネーションになることもあるが、その場合よりも話し手の感情表出が主となるとしている。B が「Y は本当にかっこいい。好きだ。」という感情を込めていることがわかる。

会話 2a (好きな車 (X と Y) について)

B : 確かにおれもかっこいいとは思った。どっちが好き X と Y。

A : Y。

B : Y—だね。うん。

つまり、終助詞が付加された 繰り返しの場合は、同意や感嘆、発見、気づきなどの感情が強く示されたターンとなっていることがわかる。

繰り返しには様々な機能があるとされていたが、終助詞が付加されていることで、繰り返しの発話の機能が明確化される。CNS、KNS は、きちんと感情を示して発話者の意図が明確化された発話をやり取りすることを好む志向があるのではないだろうか。

しかし、繰り返しが語句のみの言いさしの繰り返しの場合、会話のリズムは生まれるが、明確な意図が判断しにくく曖昧で、意図の有無も定かではない。ちょうど、山に呼びかけた自分の声そのまま遅れて戻って来る山びこのようなのである。同じ「質問 回答 繰り返し」の連鎖でも、発話としての明確な意図が感じられる「打ち返しスタイル (speak back style)」と、エコーのように響いて返ってくる「山びこスタイル (echo style)」という会話スタイルの違いがあると言える。

この傾向の違いについて言語文化という側面から考察すると、話し手の責任が重い言語文化と聞き手の責任が重い言語文化の違いが影響している可能性が考えられる。日本語文化は、聞き手の責任が重い言語文化だ (北尾 1993) と言われており、相手が述べたことに対して様々な推量を行って理解する責任が課せられている。しかし、中国語文化なども英語文化などと同様、しゃべること、言語で表現することに重きを置いており、言語で表現することで人は理解してくれると考え、そこに価値を置いていて (相原 2007) 話し手の責任が重い言語文化だと言える。

話し手の責任が重ければ、必ず意味や意図の明確な発話を相手に返す責任がある。そのため、「打ち返しスタイル」のやり取りが規範的にも求められる。一方、聞き手の責任が重ければ、聞き手は相手をわかろうとする姿勢が求められ、質問者と回答者が独立して対等な立場に立ってやり取りしているというよりは、質問者が一度その立場を置いて回答者側に寄り添い、同じ視点でその回答を聞こうとする。そこで、質問をした話し手の自己と回答を聞く時の聞き手の自己は一体であるはずなのに、聞き手になった時は、自己を分化させ回答者側に移動して回答者側と一

体化する。井出(2006)も、日本語会話では「情報内容の交換より話し手聞き手の融合・調和が優先される」としている。

以上のことから、JNSは「山びこスタイル」でも「打ち返しスタイル」でも、「質問回答 繰り返し」の連鎖の会話スタイルを志向しており、「山びこスタイル」では同じ言葉を山びこのように響かせることで、相手と融合・調和する心地よさを味わっていると言える。しかし、CNS、KNSは、「質問回答 繰り返し」の連鎖の中でも、あくまでも独立した別個の話者として意味や意図を明確にさせた「打ち返しスタイル」はかなり強く志向しているが、「山びこスタイル」については、志向が弱まると考えてよいのではないだろうか。

今後は、これ以外の連鎖にも注目してやり取りの会話スタイルを含め調査し、日本語教育への基礎研究としていきたい。

5. 主な発表論文等

〔雑誌論文〕(計 4件)

荻原稚佳子(2015)。「日中母語話者の繰り返しを含む会話の連鎖からみえる会話スタイル 質問-応答場面の連鎖を中心に」『多文化関係学』12、39-56。(査読有)

荻原稚佳子(2015)。「共話を含む言いさし発話の連鎖 会話教育への活用を目指して」『明海日本語』20号、明海大学日本語学会、pp.35-47。(査読有)

荻原稚佳子(2015)。「共話を含む言いさし発話の連鎖 日中母語話者を比較して」『明海大学外国語学部論集』第27集、pp.67-80。(査読有)

荻原稚佳子(2014)。「韓国語母語話者の韓国語会話での言いさし使用 自己開示の言いさしの働きに注目して」『応用言語学研究』No.16、明海大学大学院応用言語学研究科紀要、pp89-101。(査読有)

〔学会発表〕(計 1件)

荻原稚佳子(2017)。「繰り返しを含む会話の連鎖からみえる会話スタイル 日中韓母語話者の比較から」第39回 社会言語学会研究大会、(2017.3.19)、杏林大学。

〔図書〕(計 2件)

荻原稚佳子(2017)報告書『繰り返しを含む会話の連鎖からみえる日中韓国語母語話者の会話スタイル 質問-応答場面の連鎖を中心に』千葉印刷、pp28.

荻原稚佳子(2017)報告書『共話を含む言いさし発話の連鎖 日中母語話者の対応の違いから考える一般性と普遍性と会話教育』外為印刷、pp32.

6. 研究組織

(1)研究代表者

荻原 稚佳子 (OGIWARA, Chikako)
明海大学・外国語学部・准教授
研究者番号：10458482

(2)研究分担者

なし ()

研究者番号：

(3)連携研究者

なし ()

研究者番号：

(4)研究協力者

なし ()